

このワークは、つぎの3点を特徴とした教材です。

- 1 文の中の動詞から「助詞」を、助詞から「動詞」を、推測する
- 2 文章の流れの中で、助詞や動詞を考える
- 3 文章のプロソディを援助として解答する 以下、3点について説明します。

1 文の中の動詞から「助詞」を、助詞から「動詞」を、推測する

このワークでは、同じ文の中の助詞と動詞を、お互いを手がかりとしながら、推測していきます。例えば、雪()ふる。という助詞の穴埋めでは、「ふる」という自動詞から、動作の主体を示す【が、は、も】などの助詞を推測します。また、雪が()。という動詞の穴埋めでは、動作の主体を示す格助詞「が」を手がかりとして、【ふる、つもる、とける】などの語を推測します。ひとつの文の中の助詞と動詞、双方の推測を通して、両者の関係性への注目を高める狙いがあります。◆しかし、ワークに正答するためには、1文の中での文法や意味のみで、語を決定することはできません。つぎに述べる、「文章の流れの中で、助詞や動詞を考える」ことも、同時に行なう必要があります。

2 文章の流れの中で、助詞や動詞を考える

文章中の助詞を考える場合、穴埋めする1文内の文法や意味だけで判断することはできません。文の前後や文全体、いわゆる文脈を考えて適切な助詞を選ぶ必要があります。動詞も同様で、場の状況や時間的推移、登場人物の間柄などで、選ぶ語は変わってきます。1文の中の関係性から、こんどは文章全体の関係性へと注目を広げていかなければなりません。そのような点で、このワークは難しい課題だといえます。しかし、現実のコミュニケーションはすべて、さまざまな関係性の中にあります。文章中のことばを考えることは、日常でのことばの運用につながる、と考えています。また難しさ、という点については、「課題に慣れると、みんなわりと出来てくる」、というのがことばのテーブルの学習での実感です。なぜ、できるようになるのか。その理由としては、「文章の流れの援助」が大きいのではないかと考えています。文章には、話の筋道としての流れがあります。語り手と一体化して視点を共有し、その流れに乗ることができれば、自然と“次なることば”が口をついてくるようです。そして、その場合重要となるのが、つぎに触れる文章のリズムや強調、イントネーションといったプロソディを感知する能力だと思われます。

3 文章のプロソディを援助として解答する

文には、使われる単語とその結ばれ方によって生まれるプロソディがありますが、文章にも、文脈によってさまざまなリズムや抑揚が生まれます。文章の持つプロソディは語を想起する上で大切な手がかりとなります。実際の会話においても、私たちは、相手の語る文のプロソディによって、次に来ることばを予測している、と言われていています。今回のワークも、【ワークの使い方】で触れたように、問題を解く際、指導者が問題文の()の直前までを抑揚豊かに音読してあげると、解答(語の挿入)がしやすくなる傾向があります。また完成した文章の音読の際、指導者の音読に、合いの手を入れるように挿入語だけを(学習者に)読ませる方法も、文のプロソディへの気づきを高める狙いがあります。